

パスカルの戦争論・平和論

—あるいは寛容は信仰とどのように両立することができるか。

塩川 徹也

戦争と平和といえ、政治学の根本問題の一つであり、またグロティウスの『戦争と平和の法』を想起するまでもなく、古来、法学者・政治思想家の考察の中心的な部分を占めてきた。パスカルが、戦争と平和についていかなる思索を巡らしたかを、検討するこの小論においても、彼の政治思想の一端にふれる機会はある。しかしながら、この小論の問題意識は別のところにある。それは、いささか大上段に振りかぶった物言いをすれば、こうなる。この二十世紀末の世界、それも古典時代のフランス文明とはまったく異なった文明圏において、パスカルをいかに読み、彼といかに対話を交わすか、つまり彼といかにつきあうか、これが小論の出発点にある問である。じっさい、今日の日本人は、いや他人はいざ知らず筆者は、パスカルとすべてにおいて異なっている。言語、文化、道徳、とくに宗教、あらゆる点において、彼と筆者との間には隔りがある。もちろん隔りや無関心は違う。それどころか、パスカルとの距離感あるいは違和感こそが、筆者を彼に引きつけ、長年にわたって彼とつきあわせる原動力となっている。そしてこの距離感、筆者がパスカルに対して抱く親近感と決して矛盾しない。また当然のことながら、対象に愛情を注ぐことなしには文学研究は成立しないが、筆者がパスカルに愛情と共感を抱き続けてきたことを隠しだてする必要はあるまい。こうして愛情と違和感、排除しあうどころか、あい携えて、この謎と逆説に満ちた作家を、裁くのではなくて、理解するように筆者を誘ってやまない。しかし長年にわたる対話にもかかわらず、なお距離感は縮まらず、筆者はつねに次の問題に直面し続けている。政治であれ、哲学であれ、宗教であれ、立場を異にする対話者を前にしていかなる態度をとることができるのだろうか。

これにたいして直接的な解答を試みること、いわんや最終的な解答を提出することは、この小論のよくするところではない。ただ筆者としては、パスカルの活動と思索が、上に述べた問題意識に貴重な示唆を与えてくれることを示してみたいのである。というのも、彼はおそるべき論争家であり、一生涯にわたってさまざまな論敵とあらゆる種類の論争を行い、自らの信念と立場の正しさを相手に説得しようと努めたからである。そればかりではない。彼はしばしば、「戦争」と「平和」の名称と観念のもとに、紛争や葛藤といった状況に鋭い考察を加えている。そこで小論においては、パスカルのテキストに現れるこのふたつの言葉の検討を通じて——といってもその作業は

網羅的ではないのだが——、彼が紛争というものをどう考え、それを解消するためにいかなる価値に訴え、さらに紛争解決の努力——それはじつは正負両面の価値を持っている——にいかなる限界を見ていたかを、考察して行きたい。

I

まず「戦争」と「平和」が、言葉本来の意味で用いられている場合から始めよう。「パンセ」の中には、パスカル自身が章立てをして断章を分類し、それぞれの章に題名をつけた部分があるが、その中の一つ、いわゆる「現象の理由」の章に、問題の語はそれぞれ一回づつあらわれる。戦争については、こう言われている。「最大の災いは市民同士の戦争 [=内乱] である。」(断章 94-313)¹⁰⁾。ちなみにここで「災い」と訳した原語 *le mal* は、きわめて広範な意味領域をおおう言葉であるが、そのもっとも根本的な意味においては「悪」であり、とくにその反意語 *le bien* と対比的に用いられた場合は、その意味合いを濃くする。ところで同じ章で、「平和」はまさに「善」*le bien*、それも「最高善」*le souverain bien* と形容されているのである(断章 81-299)。これはこの上なく明確で断定的な定義である。平和は絶対的な善、戦争は絶対的な悪であり、一見したところ、疑いの余地はまったくない。

しかし「現象の理由」の章全体を読んでもみれば明らかなように、この主張は、著者の信念として、いわんや一般の真理として、提示されているわけではない。それは「識者」ないし「真の知識人」*les habiles* の見解、より正確に言えば、彼らの「背後の思想」なのである(断章 90-337)。彼らは、「生半可な知識人」*les demi-habiles* の企てるあらゆる社会改革、それが力に対する正義の支配であれ、社会的不平等の撤廃であれ、能力主義であれ、いかなる旗印で行われようとも、あらゆる革新を信用しない。彼らの抜きがたいペシミズムによれば、それこそ万人の万人に対する絶え間ない闘争を誘発して、おそるべき無政府状態を作りだす元兇なのである。この人間の社会においては、本物の価値は見あたらぬ以上、いかなる代価を払っても既存秩序を維持し乱さないことが、災いすなわち悪を最小限に食い止めることになる。だからこそ真の知識人は、徹底的な保守主義の立場を貫き、現状を維持する平和を善とし、それを攪乱する戦争を悪とするのである。しかもこの点において彼らの意見は、異なった理由からではあるが、「民衆」そして「完全なキリスト教徒」ないし「真のキリスト教徒」の意見に合致する(断章 90-337 および 14-338)。平和こそは、社会あるいは国家の内部で、どうしても擁護しなければならぬ価値なのである。

しかしここで少しわき道にそれて、注意しておかなければならないことがある。それは、ここで問題になっている平和が、共同体とくに国家の次元で捉えられており、国際関係の次元では捉えられていないことである。同様のことは戦争についてもいえる。すでに見たように、パスカルは、「最大の災いは市民同士の戦争である」といって、対

外戦争であるとは述べていない。ところが、国際関係において戦争と平和は、国内とは違った様相を呈することになる⁹⁾。この点について次の断章(974-949)の述べるところは明快である。

国家における平和の目的は、ひたすら民衆の財産を確保することにあるのだから、
(…)¹⁰⁾それが失われるのを平和が放置するときには、平和は不正なものとなり、それを守る戦争が正しくもあれば必要なものともなる。

こうして対外関係の枠の中では、民衆の財産の保全と福祉が、戦争あるいは平和の正しさを判定する基準となる。もちろんここで次のように問うことはできる。はたして国家は戦争という手段を用いて国民の財産を守ることができるのか、とくに今日のように核戦争の脅威にさらされている世界においてそれは可能なのか、また現代では世界全体が一つの巨大な共同体を形作りつつあり、そこではあらゆる戦争が同胞同士の戦争つまり内乱になりかねないのではないか。そして以上の問いの根底には、共同体の内と外で用いられる論理は同一でありうるのかどうか、いやそれ以前に内と外とは何か、という不気味な問いが潜んでいる。いずれにせよ、しかし、共同体の内部に身をおいて思索を進めるパスカルについていえば、内乱と対外戦争では引き出す結論が異なっても、思考は一貫している。なぜならいずれの場合も、いかなる社会秩序においてであれ、営々として築き上げられた現世的福祉を保全することが目標だからである。この意味で、やはり平和は、この地上の人間の共同体においては、「最高善」であり続けるのである。

II

しかし真理の観点に立った場合も、同じことがいえるのだろうか。周知の通り、パスカルの考えからすると、最高善の哲学的探求は、信仰の光に照らされないかぎり必ず挫折する。モンテーニュの後を受けて、彼はこう主張する。この世の最高の知者でさえ、むなしい探求を積み重ねたあげく、「最高善は、たんに願ひ事の対象としてさえ見いだせない」、言いかえれば、最高善が何であるかについての観念さえ思い描くことができないと、告白している(断章76-73)。そればかりではない。その名も「最高善」と題された章の中に含まれているある断章(148-425)は、「真の善」である神を喪失した後、人間たちがでっち上げた数々の偶像を列挙しているが、そのリストには戦争と平和が登場する¹¹⁾。平和の女神パクスであれ、戦争の女神ペローナであれ、偶像にすぎないかもしれないのである。

もしそうだとすれば、平和は最高善なりというパスカルの断言を額面どおりに受け取ることは困難になる。それはむしろ苦い皮肉なのである。じっさいある断章(211-

453) にもあるように、人間は邪欲から「驚嘆すべき国家運営の規則」を引き出し、平和によってそれを維持しているが、その立派な見かけにもかかわらず、「人間のこの邪悪な地金、この<悪シキサマ>figmentum malum はただ覆われているだけであり、取り除かれてはいない」のである。地上の人間共同体の価値を歪め、損ね、最高善への接近を阻むのは、この「悪シキサマ」なのである。

しかしこの「悪シキサマ」とは、そもそも何か。それは、ラロシュコーの自己愛 amour-propre と同じく変幻自在の怪物であり、『パンセ』の中では、邪欲、支配欲、傲慢、虚栄、自我、そして自己愛といったさまざまな名前で登場する。さらに、それは「一般的なものに向かう」ことを肯んじない「自分への傾き」であり、「あらゆる無秩序の始まり」である自我への執着である。ところでそれは、集団であれ、個人であれ、人間の生のあらゆる段階、パスカル自身の言葉を借りれば、「戦争において、国家において、家において、人間ひとりひとりの身体において」発現する。全体の利益と利己主義の間に生ずる抗争は、たんに集団にかかわるばかりなく、各人の自我に根ざしているのである(断章421-477)。

このような人間観に立てば、戦争と平和が各人の信仰生活にかかわることも理解できる。なぜなら信仰の一つの課題は、人間の「邪悪な地金」を根絶することにあるのだから。ところが、このような観点の変化は、戦争と平和の観念の価値の転倒を引き起こす。じっさい、ひたすら邪欲に身をうち任せているあいだ、人間は心の内に分裂を感じることはなく、やがては自らを滅びに導く偽りの休息に安らっている。しかしいったん神の恵みが下り、回心へと誘うと、人間はそれまでの休息を失い、苦しみ始める。その経緯をパスカルは繊細に分析している。

信仰の道にはいるのに、苦痛が伴うのはほんとうだ。しかしその苦痛は、われわれのうちに芽生え始める信仰に由来するのではなく、そこにまだ残っている不信仰に由来するのだ。(…)われわれに生まれながらの自然の悪徳が、超自然的な恵みに抵抗する程度に応じて、われわれは苦しむのである。われわれの心は、このふたつの相反する力のあいだで引き裂かれると感ずる。しかしこの暴力を、われわれを引きつける神のせいにして、その責任がわれわれを引き留める現世にあると考えないのは、まったくもって不当であろう。(断章924-498)

さらにパスカルは続けてこう結論する。

この世にある人間たちに神がもっとも苛酷な戦争を挑まれるとすれば、それはご自身がもたらされたこの戦争⁽⁶⁾に加わらずに彼らを放置しておくことだ。(…)主の到来以前には、この世は偽りの平和のうちに生きていたのだ。

いまや、地上の国家で人間がむさぼっていた平和は信用を失墜し、偽りの平和と呼ばれる。それに反して、イエスの言葉によって価値を与えられた戦争はキリスト教徒の義務となる。

しかしそれでは、このような展望において真の平和とは何か。それはおそらく『覚え書』が、「確実、確実、直感、歓喜、平和」という簡潔この上ない表現で暗示した平和であろう。それは、神との出会いによって達成される戦争状態の最終的な解決である。ただこのような平和は、この世にあっては、いかに信仰が熱烈であろうとも、例外的な瞬間にしか与えられない。それどころか、ルアネー嬢宛ての一通の手紙が語っているように、「一生のあいだこの戦争を耐え忍ぶ覚悟を決めなければなりません。なぜならこの世に平和はないのですから。イエス=キリストは平和ではなく、刃をもたらされたのです⁹⁾」。しかしそれに続く文章を読んでも、パスカルお得意の、正から反への立場の逆転が新たに生じていることがわかる。「しかしそれにもかかわらず認めなければなりません。聖書は、人間の知恵は神の前では狂愚にすぎないと述べていますが¹⁰⁾、同様に、この戦争は人間には苛酷に見えても、神の前では平和なのです。なぜならイエス=キリストがともにもたらされたのは、この平和なのですから。」もちろんこの平和は、生前には完全ではありえない。しかしそれは、現世を三つの邪欲の大河が焼き尽くす呪われた大地に喩え、天上のエルサレムへの望郷の念を歌う断章(545-458)に登場する信者の味わう平和、邪欲の火の川の上において、重心の低い安定した居場所に安らかに(つまり平和に)身をおち着けた後、いつの日か聖なるエルサレムの城門に導きいれられる希望を抱きつつ、救い主に手を差し伸べる信者の平和であるに違いない。いずれにせよ、キリスト教の観点からすれば、戦争と平和は、知恵と狂愚と等しく、たえず価値と役割を転換するのである。

III

以上述べたことは、信徒ひとりひとりの信仰生活にかかわる。しかし視野を拡大して、地上の信者の集合体である「戦う教会」Eglise militante を考えた場合にも、同様のことが生ずる。じっさい地上の教会もまた、つねに自らのうちに緊張や対立の萌芽をはらんでいるが、その原因は外部の不信者の存在ばかりでなく、いやそれ以上に内部の敵、すなわち邪欲の誘いに身を任せて、ひたすら人間的な価値と妥協を図る「悪い」信者、さらには「悪い」聖職者の存在にある。パスカルが、イエズス会の腐敗した決疑論とたるんだ道徳——あるいは彼がそうだと信じたもの——にたいして、「プロヴァンシアル」という論争書簡で容赦のない戦いを挑んだのも、まさにそのためであった。それは、イエスの福音に合致する清らかな道徳の再生をめざす戦いだと、パスカルは確信していた。しかし、当然といえば当然のことだが、彼の論敵たちの考えは違う。彼らは自らの非を認めるところか、反論につぐ反論を公表して、パスカルに反撃を加え

る。「プロヴァンシアル」第12信の有名な結びで、敵方の反撃に触れて、「暴力が真理を抑圧しようとする戦争は、奇怪で長期にわたる戦争なのです」⁷⁰と、パスカルが述べるのも頷けようというものである。

しかしイエズス会側の反撃はそれだけではなかった。「プロヴァンシアル」論争が一段落してから一年も経たないうちに、『決疑論者のための弁明』と題する匿名の小冊子が公表され、パスカルの告発した決疑論を擁護して、パリを始めとするいくつかの司教区の聖職者たちの憤激を買う。この文書をめぐって新たな論争が持ち上がるが、そこでイエズス会側はこう主張する。自分たちは教会の平和を望んでいるのであり、自分たちの敵こそが、決疑論者の道徳論を非難すると称して、平和を乱しているのだ。パスカルの観点からすれば、これは戦争と平和の新たな価値の転倒である。彼としては、教会における戦争と平和とは何か、その両者はいかなる価値を持つのか、それぞれの正邪を判定する基準は何かを、根本に立ちもどって考察する必要に迫られる。それこそ、彼の筆になることが確実視されている『パリ教区の司祭たちの第2文書』の目指すところである。

パスカルの結論は明快である。教会における戦争と平和の究極目標、それは、「信徒の最終目標である真理である。それに対して、戦争と平和はその手段にすぎず、そこから真理にもたらされる益に応じてのみ正当である⁷¹」。もしそうだとすれば、

教会の中で、真理が信仰の敵によって傷つけられるとき、信徒の心から真理が奪われ、そのかわりに誤りが広められようとしているとき、そのとき平和に安住するのは、教会に仕えることであろうか、それとも裏切ることであろうか。教会を守ることであろうか、滅ぼすことであろうか。(断章 974-949)

このような原理に立脚して、パスカルは、真理あるいは彼が真理と信ずるものを擁護するために、教会内部の闘争に挺身する。そこでの彼の振舞いはきわめて激しく、彼はもはや「真の知識人」、いやそれどころか「完全なキリスト教徒」の立場、つまり、いかに虚偽や狂愚に満ちていようと、地上の国の現状を受容するという立場には安住してられない、との印象を与える。それではしかし、彼は「知識よりは熱心の勝った信者」、「信仰の与える新たな光」に照らされて、人間社会の狂愚をあえて告発する熱狂的な信者の一人なのであろうか(断章 90-337)⁷²。そうではない、なぜなら真理には、知識と熱心が等しく必要だから、とパスカルは答えるであろう。彼はある断章(598-868)で、宗教論争にたいする信者の態度を考察し、「四種類の人間」を区別する。「知識を欠いた熱心、熱心を欠いた知識、知識も熱心も欠く、知識も熱心も備える」の四種類である。そして彼は、以上の分類について、つぎのように書き記す。最初の三種類の人は、教会内で誤って迫害を受けた聖者——パスカルは、聖アタナシウスと聖女アビラのテレサを例として挙げているが、彼が念頭においていたのが、ジャンセニウ

スであるのは確実である——を見捨てる。ただ最後の人々だけが、教会の平和を乱すという非難をものともせず、聖者を擁護し、彼ら自身破門の危険を冒す。しかし教会を救うのは彼らの方なのである。

パスカルの心がどちらに傾いていたのかを推察するのは、困難なことではない。しかし彼の選択は、社会の既存秩序を決して乱そうとはしない「真のキリスト教徒」ないし「完全なキリスト教徒」(断章 14-338 および 90-337) の選択と矛盾しているのではない。教会もまた、信者の共同体として、一つの社会なのだから。ところがまさにパスカルは、教会と国家のあいだに本質的な相違を見てとる。なぜなら国家においては、平和を犠牲にして守るべき本物の価値はないのに反して、教会は、「ものごとの根本規則であり、最終目標である」真理の上に築かれているからである(断章 974-949)。だからこそパスカルは、「自称正義を力に刃向かわせるフロンドの乱の不正」と教会内の異議申し立てとを比較して、両者の混同を戒め、教会には、「真の正義はあるが、いかなる暴力もない」と述べるのである(断章 85-878)。こうして論理的ではあるが、思いがけない結論が導きだされる。もし戦争が正当化され、あまっさえ賛美されるところがこの世のどこかにあるとすれば、それは現世の国家ではなく、ただ教会だけである。

IV

首尾一貫しているが、情熱に駆られ、そして何より非妥協的な態度である。これを極端に押し進めれば、おそるべき不寛容と狂信を生み出しかねないのではないか。

しかし他方、『パンセ』のある断章(172-185)は、布教において「力と脅しによる」強制に訴えることに断固反対している。しかもフィリップ・セリエの研究によれば¹⁰⁰、この発言はたまたま口をついて出たという類のものではない。それは、ドナトゥス派異端の弾圧のためには強制もやむなしとする聖アウグスティヌス、ほかの点ではこよなく尊敬していたこの聖者の見解を、念頭に置いた意見表明なのである。そこからセリエは、「パスカルはベールとヴォルテールを予告している」と主張する。この二人の寛容論を同列に論ずることができるかどうかについては、留保をつける必要があるかもしれない¹⁰¹。しかしパスカルが、言葉こそ使わないものの、寛容に深く思いを潜めていたことを疑う理由はない。しかしそうなると、つぎの問題が生ずる。パスカルは、道徳と神学の原則についてはあれほど非妥協的だったのに、どうして寛容の観念に目覚めるに至ったのだろうか。いいかえれば、彼の思想の中で、寛容と非妥協性のふたつの観念はどのように結びついていたのか、また一見両立しないように見えるこの鎖の両端を、彼はどうして保持することができたのか。これが、最後に検討すべき問題である。

ここで導きの糸になるのは、しばしば『プロヴァンシアル』第19信の名で呼ばれる

手紙の断片の中に見いだされるラテン語の引用句である。

Quod bellum firmavit, pax ficta non auferat.

すなわち、「戦いの確立したことを、偽りの平和が破壊することのないように。」つまりここでもまた、戦争と平和が問題になっているのである。ほかの場所ですでに示したことが¹²⁾、この聖ヒエロニムスにさかのぼる文句は、1654年、異端宣告を受けたあの五命題をジャンセニウスのものとするを始めて正式に決定した高位聖職者会議において、トゥールーズの大司教、ピエール・ド・マルカによって、より原文に密着した形で、引用されていた。マルカは、この引用を錦の御旗に掲げて、ジャンセニウス擁護派の司教たちによって主張された妥協案、つまり教会の平和を守るためには、五命題を断罪するにとどめて、ジャンセニウスの名を出すことは差し控えるべきだとする提案に反駁を加えた。マルカの議論は勝利を収めた。それも当然のことであった。彼の後ろには、会議の進行の一部始終に監視の目を光らせていた宰相マザランが控えていたからである。この会議の決定が、ジャンセニスト弾圧を目的として2年後に作成された信仰宣誓書の法的根拠になったことを思えば、1654年の聖職者会議は、信仰宣誓書の署名強制問題の真の出発点であるといつてよい。

ところで、パスカルが問題の断片で、聖ヒエロニムスの言葉を再び取り上げたのは、信仰宣誓書の署名強制に反対するためであった。この状況を考慮にいれば、引用句の意味合いはおそらく次のごとくであろう。「戦いの確立したこと」、それは、『プロヴァンシアル』第17信および第18信が主張するように、「ジャンセニウスの意味」にかんする解釈の相違にもかかわらず、「教会には、いかなる異端もない」ことである¹³⁾。それに反して、「偽りの平和」は、ジャンセニウスの意味にかんして、信仰宣誓書の署名強制によって得られる、見せかけの意見の一致である。この偽りの平和は、教会内の信仰の統一を実現するという口実のもとに、じつはあらゆる良心の自由を、それも事実問題においてさえ、抹殺しかねないのである。

このような解釈が必ずしも恣意を免れていないことは認めざるを得ない。なにしろ問題の引用句は、未完の断片のそれも欄外に、書き込まれているにすぎないのだから。しかし次のことは確実である。この『プロヴァンシアル』第19信の断片、そして何より最後の二通の『プロヴァンシアル』は、いずれも信仰宣誓書の署名に反対することを主要な目標としている¹⁴⁾。しかしそれでは、教会当局の決定に逆らって、パスカルを抵抗運動に駆りたてた理由はなにか。

まず挙げられるのは、神学上の理由である。断罪された五命題とジャンセニウスの学説を同一視することは、パスカルと彼の友人たちによれば、教会がその創立当初から変わらず信じてきた「有効な恵み」の教義を断罪することである¹⁵⁾。この理由は、当時の用語を使えば、「権利問題」に属する。次に来るのは、テキストの解釈にかかわる

理由である。パスカルたちの立場からすれば、ジャンセニウスの学説は五命題の主張と異なっている以上、両者を混同して、『「アウグスティヌス」と題する彼の著書に含まれた、コルネリウス・ジャンセニウスの五命題の学説」⁽¹⁶⁾を云々する信仰宣誓書に従うことはできない。これは、当時「事実問題」と呼ばれた争点である。

しかし以上のふたつの理由を越えて、パスカルが強調する最後の理由がある。それは、事実問題においては、いかなる立場を採ろうとも、異端は生じないということである。なぜなら、事実問題の対象となる「事実にかんすることがら」の認識は、感覚ないし理性の権限に属し、その点において、教会が神に由来する権威に基づいて決定する「信仰にかかわる事項」とは、性質を異にするからである⁽¹⁷⁾。

したがって信仰にかんする決定に刃向かうことは、自分勝手な考えを神の考えに対抗させることであって、異端である。しかし個々のいくつかの事実を信じないことは、無分別ではあるかもしれないが、異端ではない。なぜなら、それは明晰でありうる理性を、大なりとはいえ、この点では不可謬とはいえぬ権威に対抗させるにすぎないからである⁽¹⁸⁾。

だからといって、事実問題において、教会の決定に、たとえそれが誤っていようと、自由に異議を唱えることが許されているわけではない。そんなことをすれば、教会の規律を乱すことになるだろうから。信徒はこのような事態にあっては、「恭しい沈黙」を守らなければならない。しかし逆に、このような種類の決定に対して、宣誓という手段を用いて明白な同意を求めることは、「奇怪な圧制」⁽¹⁹⁾であろう。良心がその決定に納得することができない場合、それは良心に自分自身を裏切るように無理強いすることになるからである。ところでそれこそ、もし信仰宣誓書の署名が強制されれば、ジャンセニウスの学説と有効な恵みの教義の一致を確信しているいわゆるジャンセニストたちの身に降りかかることである。

このような議論を支えとして、パスカルは信仰宣誓書の署名強制の企てに抗議の声を上げる。だがこれは取りも直さず、ここで問題になっているのが、せんじつめれば、良心の自由あるいは寛容であるということではないか。もちろんそれは、「事実にかんすることがら」にしか係わらない以上、相対的で限界がある。それに第一、パスカル自身、人間の理性を信仰の神秘に服従させる必要性を認めている。にもかかわらず、寛容を良心の要請から導きだす点において、パスカルの考えは注目に値する。

彼は、未完の『プロヴァンシアル』第19信の余白に、つぎのような断片的な対話を書きつけている⁽²⁰⁾。ある対話者が彼に尋ねる。

— 「だがきみは間違ったかもしれないではないか。」

彼の答えて曰く。

—「誓って言おう¹⁾。ぼくは間違ったかもしれないとは思ふ。だが自分が間違えたと思っているとは誓わない。」

ここで対話は途切れている。だがこの後に続けて、パスカルがこうつけ加えたと思像しても差し支えあるまい。

—「だからぼくが間違えたと思っていると、無理やり誓わせないでくれ。」

パスカルにとって寛容とは、良心、それも信仰宣誓書の署名問題において彼の抱いていた確信の程度に匹敵する信念を持った良心を尊重し、せめて偽りの誓いを強制しないところにあるのである。

* * *

『プロヴァンシアル』論争からはぼ30年後、ピエール・ベールは、寛容論の古典となった著作『「強いて入らしめよ」というイエス・キリストの言葉の哲学的註解』の中で、有名な「迷える良心の権利」を唱えるが、この主張はおそらくパスカルを後込みさせたであろう。とはいえ、ベールが、「われわれの義務のうち、第一にして不可欠この上ないものは、良心の勧告に逆らって行動しないという義務である。良心の光明に逆らってなされるあらゆる行いは、本質的に悪い」²⁾と述べる時、パスカルの立場は、ふつつ考えられている以上にベールに近い。いずれにせよ、パスカルによる寛容の価値の発見においては、信仰宣誓書の署名強制に対する抵抗運動の経験が決定的な役割を果たしているのである。そして、もしもパスカルが、理論上の非妥協性と実践上の寛容との間の微妙で危うい平衡、民族間・文明間の対話にも同様に必要とされるこの平衡を、かろうじて保つことができたとすれば、それはこの同じ経験によるのではあるまいか。

註

- (1) 『パンセ』の引用は断章番号によって行う。最初の数字はラフュマ版、次の数字はブランシュヴィック版の配列番号である。
- (2) 対外戦争と市民同士の戦争すなわち内乱の区別は、プラトンの『国家』第5巻470B-D以来、一つの伝統となっており、エラスムスもラプレーもこの区別に言

及している。エラスムスの『平和の訴え』(岩波文庫)、64ページおよび訳注(115)を参照のこと。

- (3) もっとも「平和」の語は、最終稿では削除されている。
- (4) 『マタイによる福音書』10章34節参照。
- (5) Pascal, *Oeuvres complètes*, p.p. L. Lafuma, Paris, Seuil, 1963, p.266. パスカルのテキストは『パンセ』を除いて、この版によって引用する(略号、O.C.)。
- (6) 『コリントの信徒への手紙 一』、3章19節。同書、1章18-25節も参照のこと。
- (7) O.C. p. 429.
- (8) O.C. p. 478.
- (9) しかし「知識よりは熱心の勝った信者」の行動の指針となる典拠は何か。それは、おそらく断章14-338の示唆するように、『ヤコブの手紙』第2章の「人を分け隔てしてはならない」という教えであろう。俗世間ではともかく、教会の中では身分や財産によって人を差別してはならないとするヤコブの主張は、社会改革を夢見るさまざまな潮流のキリスト教徒の拠り所となってきたが、現実の教会において、とくに旧体制下のフランスの教会において、それが画餅にすぎないことはいうまでもない。しかし逆に、問題の一節が、キリスト教徒の良心に突きささる刺であり続けたことも事実である。
- (10) Ph. SELLIER, *Pascal et saint Augustin*, A. Colin, 1970, p. 542-545.
- (11) 両者の観点の相違については、野沢協氏によるベールの『寛容論集』の翻訳の書評で触れたことがある。『朝日ジャーナル』、1980年8月15・22日号、69-71ページ。
- (12) 拙稿、「引用句の運命——いわゆる『第十九プロヴァンシアル』の断片の一句をめぐって」、『文学』1988年9月号、8-23ページ。
- (13) ピエール・ニコルによるラテン語訳の第17信・第18信の副題に見いだされる表現。
- (14) この点にかんしては、次の拙稿を参照のこと。“L'enjeu des *XVIIe et XVIIIe Provinciales*”, *C.A.I.E.F.*, No. 40, mai 1988, p. 219-232.
- (15) 『プロヴァンシアル』第17信、O.C., p. 460.
- (16) 信仰宣誓書のテキストは次の文書にみられる。*Relation des délibérations du clergé de France sur les Constitutions de nos SS. PP. les Papes Innocent X et Alexandre VII...*, Paris, 1661 (B.N. Ld^s 252), p. 78 et 87.
- (17) 『プロヴァンシアル』第17信、O.C., p. 457.
- (18) 同所、O.C., p. 457-458.
- (19) 同所、O.C., p. 460.
- (20) O.C., p. 469.

(21) したがって、ここで問題になっているのは、宣誓なのである。

(22) Pierre Bayle, *Commentaire philosophique sur ces paroles de Jésus-Christ, "contrainstes d'entrer"*, seconde partie, ch.8. René Pomeau, *L'âge classique III-1680-1720*, Arthaud, 1971, p.190の引用による。出典については、佐野泰雄氏の教示をえた。

付記

本稿は、1988年9月27日から29日にかけて、東京大学学術研究奨励資金によって開催された国際シンポジウム「パスカル、ポール・ロワヤル、東洋、西洋」における研究発表“La guerre et la paix selon Pascal”に手を加えたものである。

二宮敬先生の退官を記念して編まれた、この「中世・16世紀文学研究特集」に、17世紀の作家を対象とし、しかも口頭とはいえ他の機会に発表した文章を寄せるのは、あるいは僭越の謗りを受けるかもしれないが、副題にも見られるように小論を支える問題意識の一つが、「寛容」とは何であるかという問いであることに免じてご寛恕を乞うばかりである。じっさい、学部4年の夏学期にモンテーニュの『エッセー』第3巻2章“Du repentir”を一對一で読んでいただくという特典に浴して以来、先生から受けた学恩は限りないが、その中核には、渡辺一夫から引き継がれた寛容についての教えがあった。潔癖で厳密を尊ぶパスカルのような信仰者において、寛容はいかなる役割を果たしうるのかという疑問を、筆者が課題として意識するようになったのも、そのためである。恥ずかしいことに、この疑問はいくら反芻しても、快刀乱麻を断つ答は出てこない。せめてこのつたない中間報告を、先生は受け取ってくださいであろうか。